



歯医者さんが教える 歯と口腔の健康管理

〔第19回〕入院手術を要する歯科疾患について

監修／歯学博士

鹿島 健司

歯科の領域でも入院手術が必要な疾患があり、昨年この頁でご説明した口腔がん（悪性腫瘍）や外傷・骨



写真1、写真2 歯根嚢胞のX線像
歯根端切除を行なって摘出する

折をはじめ、顎の骨や周辺の軟組織にできる良性腫瘍、嚢胞、炎症等が主な対象となります。嚢胞とは病的に形成された袋状の構造を言い、歯の神経（歯髄）の炎症が原因で歯根の先にできた嚢胞は歯根嚢胞と呼ばれ、臨床的に頻度の高いものです（写真1）。歯根嚢胞は歯根端切除術と同時に摘出しますが（写真2）、大きいケースでは入院手術を要することもあります。

折をはじめ、顎の骨や周辺の軟組織にできる良性腫瘍、嚢胞、炎症等が主な対象となります。嚢胞とは病的に形成された袋状の構造を言い、歯の神経（歯髄）の炎症が原因で歯根の先にできた嚢胞は歯根嚢胞と呼ばれ、臨床的に頻度の高いものです（写真1）。歯根嚢胞は歯根端切除術と同時に摘出しますが（写真2）、大きいケースでは入院手術を要することもあります。

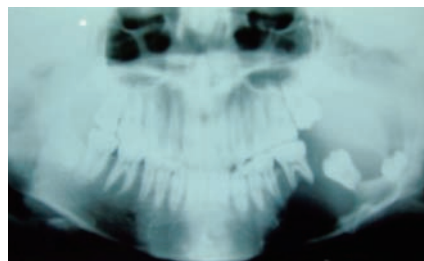


写真3 左下顎の良性腫瘍像

左の下顎が大きく腫れてきて、かかりつけの歯科医から紹介されて来院されました。

写真3は左の下顎骨の中にできたエナメル上皮腫という良性腫瘍のX線像です。私が大学病院の口腔外科に在職中の症例ですが（14歳女性）、

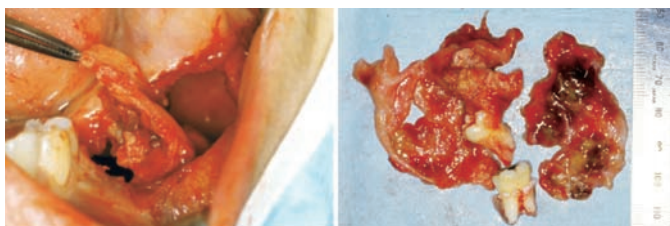
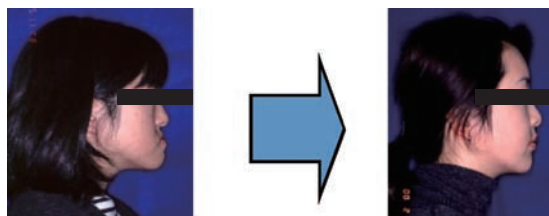


写真4、写真5 腫瘍組織とともに、埋伏していた歯も摘出

また前回、『歯並びと矯正治療』の際に顎変形症の話をしました。少し具体的な写真を示して追加説明します。顎変形症とは、顎の骨の形や大きさの異常により不正咬合をきたしている状態です。写真6のようなケースは日本人に最も多い顎変形症で、一般には受け口と呼ばれています。まずは術前の矯正治療が行われ、次いで、上顎骨や下顎骨に対して顎変形症手術が行われます。術後に再び矯正治療が行われて治療が終了となります。多くの場合、下顎



術前歯列矯正 → 顎変形症手術（上顎骨・下顎骨） → 術後破列矯正



写真6 手術前後の比較

が過成長している場合は下顎骨の後方移動術を、上顎が過成長している場合は上顎骨の前方移動術を行います。写真6はその両方の手術を行ったケースの術前・術後を表します。この症例では、上顎を約5ミリ前下方に、下顎を約10ミリ後方に移動していますが、かみ合わせだけでなく顔貌も著明な改善を得ることができました。患者さんのQOL（Quality of Life）に大きく影響する治療と言えます。

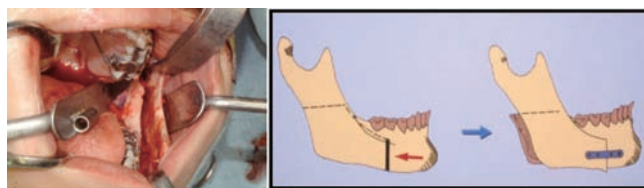


写真7 下顎骨の後方移動術とそのシェーマ（図解）

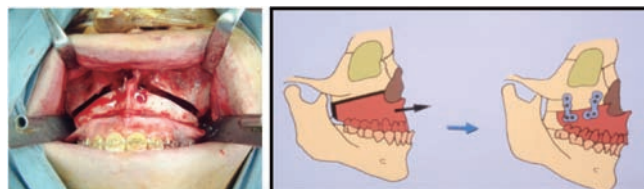


写真8 上顎骨の前方移動術とそのシェーマ（図解）

写真7、写真8に手術中の写真とそのシェーマ（図解）を示しますが、これらはすべて口腔の中からアプローチします。日本人のか細い下顎骨を縦に分割してずらして下顎を後方に移動したり、上顎骨の水平骨切りを行なったりと、歯科や口腔外科ではこのような大きな手術も数多く行われています。

監修／鹿島健司（歯学博士）。1958年1月生まれ。かしま歯科医院院長
日本大学兼任講師。日本先進インプラント医療学会代議員・指導医・専門医